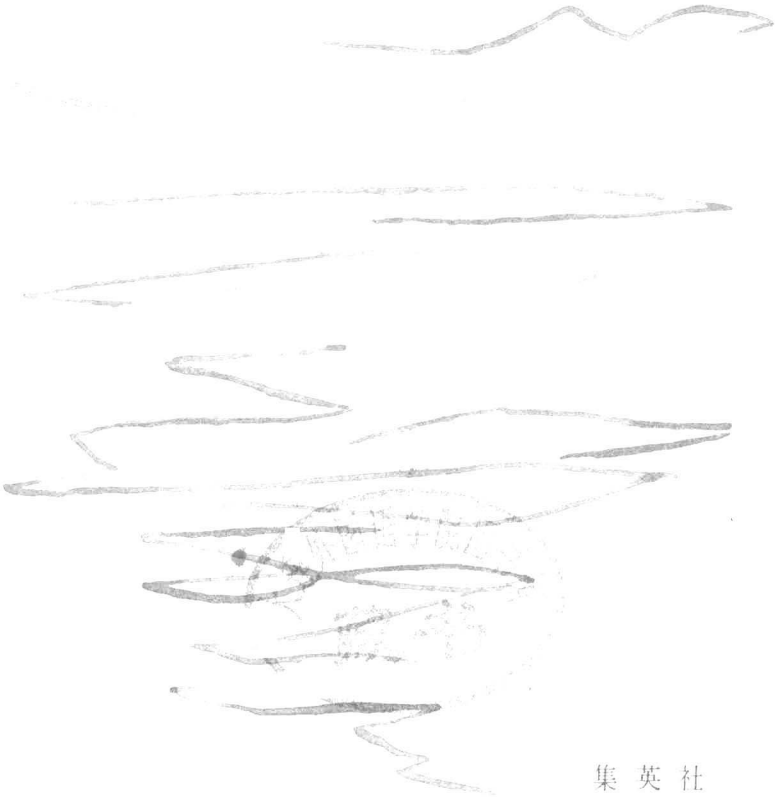
雲よ汝(なれ)は

丹羽文雄



集英社

雲よ汝(なれ)は

昭和四十一年四月二十五日　初版印刷
昭和四十一年四月三十日　初版発行

定価　六五〇円

著者　丹羽文雄
発行者　陶山巖
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区神田一ッ橋二ノ三
電話　東京(265)六一一一
振替　東京　一五六五三
印刷所　大文堂印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします。　Printed in Japan ©

目

次

雲よ汝(なれ)は　五
豹と薔薇　二七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

藍染めて　一六九
あとがき　二六〇

装幀　田村孝之介

雲よ汝(なれ)は

一

和子の家は、五軒長屋の北の端にあった。両隣の物音になやまされることはなかったが、冬になると、長屋を代表して北風にいためつけられた。移ってきた当座は、家の前に草花をうえたが、近所の子供にあらされると、二度と草花をうえる気持がなくなった。長屋が十五棟並んでいた。友安製煉所の工員の住宅であった。

「和子、あれを持って来い」

と、父親の松次が、和子にいった。二タ間の家であった。小学生の和子は、ためらった。が、父のいいつけに逆らうことは出来なかった。和子はみじめな気持だった。小さい机の引出から成績表をとり出すと、はにかみながら父親にわたした。

「これをみてやってくれ。こいつは、鷹なんだ。鳶が鷹の子を生んだのだよ」

客は成績表をひらいて、大げさに感心してみせた。

「こいつはすげえや。ほんまに鷹の子だ。おかみさんがしっかりものだから、子供は学校でこんなに成績がいいんだろうな」

客はおなじ製煉所の工員だった。もっとも和子の家にくる客といえば、工員にかぎられた。字も満足に書けない父親だった。

「こいつの気性は、女房そっくりだ、おそろしく勝気なんだ。負けることが、大っ嫌い。勉強はもちろん、あそびごとでも、だれにもひけをとらないんだ」

父親は、和子の価値を成績表ではかるのだった。習字や画や、運動会の選手になるかならないかという問

題にも干渉した。自分に出来なかったことを娘に求めるのも、おのれの劣等感のしわざかも知れなかった。が、不思議なくらい、和子は父と母を満足させる成績をあげた。

しかし、父は、和子のためにとりたてて将来のことを考えているふうもなかった。そのときどきの、自分の気分に添った子供でいてくれれば、よかったのだ。いっぱいきげんのとき、父は和子を抱いた。が、ふきげんの時は、道ばたの捨猫を見るように娘を見た。酒をのめば、父は快活になり、やさしかった。目鼻立ちのはっきりとした大きな顔で、とくに目がきれいであった。子供心にも、和子は魅力的と感じた。が、ひとたび怒り出すと、その目は剣のように和子の胸を刺した。父は、気まぐれであった。気分ひとつで、和子はいい子にもなり、悪い子にもされた。が、感情の起伏のはげしさでは、母のたねは決して父親にひけをとらなかった。

母と父は、よく和子を叱った。母は、父ともいい争った。母は何かにつけて小言をいった。ずんぐりと肥った母は、なりふりをかまわなかった。母には、毎日が癪のたねのようであった。父と母が、たがいに反抗的であるのが、和子には理解出来なかった。和子は、考えることがある。貧しい家庭で継母の手に育てられた履歴が、母をそんな人間に作りあげたのか。それとも、生まれつきの性格というのだろうか。転々と子守りにやらされながらも、学校では年々きまって組の総代をつとめたという母は、おそろしいほど気がつよかった。和子はよく母にいわれた。

「野口英世をみてごらん、新井白石をごらんよ」

母の字は、きれいであった。何でもよく知っていた。その方法があやまっていたとしても、和子をはげまし、教えてくれたのは母親だった。

母は朝起きると、手をぬらして、髪を撫でつけた。指の先に塩をつけて、歯をこすった。

母は、組のものの成績と和子のを比較しなかった。よい成績を見せると、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「和子としては、あたりまえだよ」
と、賞めてくれなかった。
父と母は、周囲を気にしないでは暮らせない人柄のようであった。臆病ものというのだろう。そのため、家の中ではたがいにどなり合うのかも知れなかった。母は和子をみごもったとき、良人の松次から目を外らす時間をもったようである。母は、空想した。近所のだれよりもすばらしい赤ん坊を生むこと。そして、その子をだれにも負けないように立派に育て上げること。生まれて来た子は、七百五十匁の女の子だった。母は、女の子であったことに負目を感じたようである。乳が出ないので、赤ん坊は夜昼泣いた。痩せて、目ばかり大きな嬰児は、親の目にも可愛いとは思えなかった。母は心を痛めたのだ。母はくよくよしたが、いつか自分の心を解きほぐす方法を見つけたようであった。それは、自分を空想の世界に置くのだった。或いはそれは、逃避的だったかも知れないが、痩せた赤ん坊に対する母の夢は、学校に上るようになったとき、すばらしく頭のよい生徒になってくれることだった。母は、学問というものを何よりも重大に考えていた。それでようやく母の気持は、安らぐのだった。
和子が小学校に通うようになると、母は自分の願望を娘に押しつけた。和子には、野口英世がどんなに偉いひとか、新井白石とは現在生きているひとか、わからなかった。
見るからに、和子はきかん気の娘になった。利口そうな顔をしていた。はきはきとした性格だった。が、友達にはあまり好かれなかった。和子は、何かにつけて自己中心にふるまった。友達は、自然とはなれていった。近所の友達とあそばなかった。そんなところから、和子の劣等感が芽を出しはじめていたのかも知れない。先生のあいだにも、和子は問題にされた。
「いやな子だ、だまりこくって、眼つきったら、まるで大人じゃないか」
すると、受持の先生が答えた。

「あの子は、ひとり子だから、先生たちの前に出ると、こわいんだよ」

和子は大人びたことを考えて、悩んだ。和子を苦しめるものは、価値のなくなったときの自分を思うおそれであった。母は和子の未来に、かがやかしいものが待ちかまえているように思いこんでいた。和子は、母の傑作であった。のこされた夢であった。それが次第に、和子の重荷となった。母の夢を実現するまでは、自分は倒れてはならないのだった。そう思うと、不安と義務感が、小さい頭をしめつけた。そのころから和子は、自分を特異視するようになった。自分はどの生徒とも変っているのだと思った。子供らしくなくて、いつも何かに苦しめられているような自分である。そう感じることは、自分を悲劇の主人公の席におくことになり、そんな空想で自己満足した。

が、精神の緊張を持続させることは不可能であった。子供には子供らしくからだをぶっつけて、あばれる場所が必要だった。

軽便電車で一時間ものれば、室生市に着いた。そこに、母の実家があった。実家には、祖父と母の妹が雑貨商を営んでいた。和子の旅行には、適当な距離であった。

「和子か、よく来たな。みんな達者か」

と、歓迎された。

この家の空気は、わが家とひどくちがっていた。和子は、ルーズなものを感じたくらいである。祖父と叔母は、和子をあまやかした。男の子のように乱暴をしても、叱らなかった。和子は、無邪気な子供に還った。土曜から日曜にかけて祖父の家にいくことが愉しくて、和子は何かと理由をつけて室生市に出向いた。

五年生の夏、例年どおり和子は祖父の家にいた。半月が経った。母から、かえるようにといって来た。

「淋しくなったんだよ、和子がいないので、たまらなくなったんだろう」

と、祖父が笑った。ふだんは、いそいそとかえり支度をする和子が、そのときは動こうとしなかった。
「かえりたくないの」
「どうして母さんのところが嫌なの？　母さんは淋しがってるのよ。和子のほかに子供がないから、和子のことばかり思ってるのよ。母さんの気持もわかってやらないと、可哀そうよ」
と、叔母がいった。
かえりたくない理由が、山ほどあった。が、和子には器用にそれらを口に出すことが出来なかった。母の期待が重苦しいのだと、それを上手にいうことが出来なかった。祖父や叔母が母の味方になり、和子を口説き落そうとすると、和子が泣き出した。
そのことを、どんなふうに母に報告されたのか、ひさしぶりに和子がわが家にかえると、
「和子」
と、母が向き合って坐った。母は悲しい顔をした。
「自分の家がどうして嫌なのか、いってごらん。母さんは、あんたのためばかりを思ってるのよ」
母の目に涙がたまるのを、和子は自分と関係がないように見た。淋しそうな母の表情だった。自分の落度にすこしも気のついていない、善良な母親であった。和子はこのとき、母と自分のあいだの溝を感じた。自分は母の一部分であり、母と自分は一体という観念が崩れはじめた。
そのことがあってから室生市にいっても、祖父の家が何となく落着けない場所になった。

十二月八日、戦争がはじまった。田舎の小学校の上にも、重たい空気が覆った。和子たちは、塗りかえられる世界地図をかこんで、かたずをのんだ。そのときから、和子たちは銃後の子供という名称にすり換えられた。子供は子供らしく、戦争に協力しなければならなかった。一日一日を、戦争という世界ですごさねば

ならなかった。友安製煉所は、重工場にきりかえられて、昼夜なしに工場全体が唸り声をたてた。長屋には、国防婦人会が結成された。白襷の婦人連は、入営の見送りで忙しがった。一方では、待避訓練がはじまり、バケツ・リレーがくりかえされた。町の隅々まで騒ぎがひろまり、町は落着きを失った。

「今日のごはん、まずいわ」

「贅沢をいってはいけないよ。どこでも、これからは麦飯をたべるのよ。お米は、兵隊さんに食べてもらわなければならないからね」

そのころ、和子は母の変化に気がついた。和子の上に注がれていた母の全神経が、外に向けられるようになった。母の腹部が、大きくせり出した。

和子が六年生となると、妹が生まれた。

「はま子と私は、十も年齢がちがうわ」

父と母の気持が、それとなく和子から外れていった。妹が出来たことは、うれしかった。が、和子ははじめて孤独を味わった。

本人の意志がどうあろうと、和子はわが家をはなれて、女学校にはいらねばならなかった。わが家から通えるような距離に女学校はなかった。わが家をはなれることは、心細い。が、それは和子がうけねばならない運命の試練だった。

「仙太郎の家にあずけるのが、いちばん安心だわ。仙太郎も厄介もの扱いはしないだろうから。他人をあずかるのでなく、姪を世話するのだから、仙太郎もよろこんで迎えてくれると思うわ」

母の弟の仙太郎は、丹野市の運送業古賀家の養子だった。

「しかし、それはこちらの気持で、先方は何と思うかわからないよ。それに先方には、子供が三人もいるんだ」と、父が答えた。

「ひとりふえて、子供が四人になるだけのことだよ。三人も四人も、世話するとなれば、おなじことだから」

仙太郎から、承知したという返事があった。

春休みが終ると、和子は丹野市の女学校がはじまる前日、行李とふとんといっしょに叔父の家に落着いた。入学試験というものはなく、小学校の成績表で入学はきめられた。新入生は定員に満たなかった。

叔父の家には、盲目の祖父夫婦と、叔母、三人の子供、それに二人の使用人がいた。かなり裕福な生活状態で、家の中はひろびろとしていた。和子は、二階の一ト間があてがわれた。和子は、解放感をおぼえた。自分のことは、だれも知らないのだ。工員の娘として生まれ、今日まですごしてきた自分のことを知っているひとはいないのだ。ききなれた物音からも隔離された。和子は、のびのびとした。父と母の目のとどかないところに自分はいるのである。部屋からの眺めも、気に入った。机に向かっていて目をあげると、庭の池が見えた。池のまがり角から、白いあひるが一羽およぎ出るさまは、可愛いかった。あひるは、音もなく水脈をつけた。池に添って、竹藪があった。

学校の友達が、この部屋に来るようになった。君子は近くのせいもあり、毎日のようにあらわれた。

「ここに来るのがたのしみよ」

「何がそんなに気に入っているの?」

「この窓からの眺めが、好きよ」

君子は、医者の娘だった。君子がわざわざやって来るのは、夕陽の沈むいっときを見るためであった。陽が最後のかがやきを燃えたたせる。それは大自然が、地上の人間にあたえる一日の最後のすばらしい贈物であった。規模の大きな眺望だった。白いあひるが、紅に染まるのだった。自然のめぐみをうっとりと眺めている君子は、円満な性格だった。夕陽のいっときをわざわざ見に通うことの出来るのも、おだやかな性格のせいだった。和子は、自分との相違を感じた。君子は、身動きをしなかった。夕陽の最後のかがやきに、和

子もみとれる。が、君子ほど熱心にはなれなかった。君子はそばの友達をわすれているようであった。しばらく経つと、

「あの竹藪の前に明治時代の女を立たせたら、すばらしいと思わない?」

和子は、そんな夢想をする君子の横顔こそすばらしいと、胸の中でつぶやいた。君子は、文学少女だった。和子はこのとき、自分というものを知らされたような気がした。そのことが、妙に苦しかった。君子の世界と自分の世界はちがう。二つの世界はとけ合うことがないのだと思われた。

和子は、自分も文学少女だと自認していた。手あたり次第に本をよんだ。大人の小説であった。くだらないものもあり、考えさせられる小説もあった。が、文学とは何か、和子にはよくわからなかった。その点、君子は大人だったようである。君子が持っている本の中には、和子の知らない外国のものがあった。君子が美を味わう感覚には、和子は遠く及ばない気がした。君子の心の領域にくらべると、自分のはうんとせまいのだ。和子は君子と文学について語り合う気はなかった。そんなことをしては恥しい。和子は、孤独を感じた。だれも私を相手にしていないのだ。その思いが、和子をいらいらさせた。

が、学校では、小学校からひきつづいて、和子の成績は抜群だった。同級生は、和子に一目を置いた。和子は自信をもち、落着きはらっていた。すくなくとも外観は、そんなふうに見えた。学校の科目は、勤労奉仕をふくめて、朝から夜までつまっていた。和子は、自分がすばらしくなるための機会とあれば、見のがさなかった。和子は、万能選手だった。展覧会にも、研究発表にも、和子の出来ばえはずば抜けていた。和子は、ひとびとの関心をあび、いかにも落着きはらって、主役を演じているようであった。丹野市の女学校では、家庭生活の差別が直接生徒の上にあらわれなかった。小学校時代にはなかった快活さが、和子の上に加わった。

学校におけるかぎり、和子は一応の成功者であった。自分を主張することの快さを味わった。が、そのこ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com